

発掘調査の概要

藤原宮外周帯の調査（飛鳥藤原第197-4次）

藤原宮には、宮大垣を取り囲む外濠と、宮周辺の条坊道路との間に幅60mもの広大な空閑地があったことがわかっています。この空閑地は、藤原宮だけにみられる特徴的なもので、「外周帯」と呼んでいます。本調査区は、外周帯のなかでも、南面大垣中門と六条大路の間に位置するところにあります。これまでの調査成果から、調査区内は朱雀大路、および先行朱雀大路の想定位置にあたることが判明しており、発掘調査でもこれらに関する遺構が検出されることが予想されました。

調査は水路改修にともなうもので、水路に沿って南北幅約1.5m、東西約100mの調査区を設け発掘をおこないました。調査期間は2018年11月19日から12月14日まで、調査面積は216㎡です。

調査区内では、①近・現代の水路関連層、②古代の可能性のある整地土、③古墳時代以前の河川性砂礫層、④沼状堆積層の順に土層が確認できました。水路による削平が著しく、遺構の残存状況はよくありませんでしたが、南北溝4条、斜行溝1条、井戸1基を検出することができました。



調査区全景（西から）

朱雀大路西側溝、および先行朱雀大路西側溝の想定位置では、それぞれ南北溝を検出しました。前者は、幅4.2m、深さ0.4m、後者は、幅1.0m、深さ0.2mを測ります。いずれも、上面は削平されており底面付近がかるうじて残っている状況だと考えられます。ただし現状では、いずれの溝にも古代の遺物は含まれず、溝の直下には古墳時代以前の河川性砂礫層もあるため、朱雀大路西側溝・先行朱雀大路西側溝と断定するにはいたりませんでした。今後の周辺の調査成果を待ちたいと思います。なお、朱雀大路東側溝については確認できませんでした。想定位置には、調査区南側に位置するコモ池から水を引き込むための旧水路があったため、東側溝は壊されてしまったとみられます。

また、調査区東端で井戸を1基検出しました。井戸は、古墳時代の斜行溝を掘り込んでおり、掘方は直径3.3m、深さ1.3m以上あります。横板組の井戸枠が少なくとも2段残存しており、その井戸枠の内法寸法は83cmありました。井戸からは、藤原宮造営期の土器が出土しましたが、掘方や埋土には藤原宮の瓦を含んでいませんでした。このことから、この井戸は、藤原宮造営期に短期間使用されたものとみられます。

このように、今回の調査は狭い調査区でしたが、藤原宮造営期における藤原宮外周帯の土地利用の一端を確認することができました。また、古墳時代以前の河川性砂礫層や沼状堆積層の広がり、藤原宮造営前の調査区一帯の旧地形を考える上で大きな参考になります。藤原宮造営に際しては、このような軟弱な地盤を大規模に造成し、利用可能な土地に改良していったことがあきらかになりました。

（都城発掘調査部 石田 由紀子）



井戸検出状況（南から）